

高原地域における肉用牛生産の現状と課題（2）：子牛販売収入に影響をおよぼす要因について

武藤, 軍一郎
九州大学農学部

古沢, 弘敏
九州大学農学部

福留, 功
九州大学農学部

<https://doi.org/10.15017/12643>

出版情報：九州大学農学部農場研究資料. 8, pp.111-114, 1985-10. 九州大学農学部附属農場
バージョン：
権利関係：

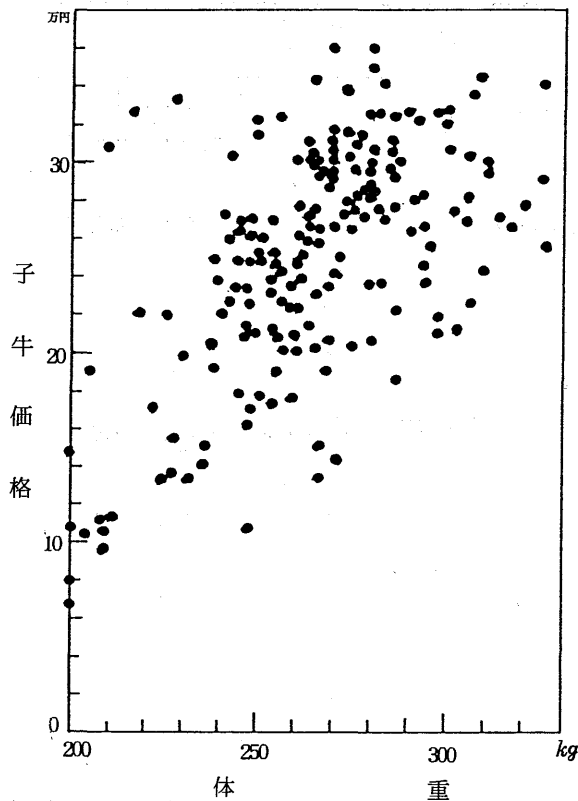
高原地域における肉用牛生産の現状と課題

(第2報) 子牛販売収入に影響をおよぼす要因について

武藤軍一郎・古沢 弘敏・福留 功

1. 目的

肉用牛部門の粗収入のほとんどを子牛販売収入が占める。子牛販売収入は、年間生産子牛頭数、雌雄割合、自家保有率、1頭当り価格などによって構成される。このうちとくに、1頭当り価格は重要で、子牛個体によって差が大きい(第1図)。このため、農家は放牧を中止し、出荷時の体重増を目差し、舎飼いにより、濃厚飼料の多給に向っている。だが、このことによるマイナス面も考えられる。そこで、子牛販売収入に影響する要因を可能なかぎり整理し、飼養方法、経営形態のあり方を考える資料にしたい。



第1図 出荷時体重と子牛価格

注) 1. 去勢雄

2. 結果及び考察

1) 第1図で認められるように、子牛の価格はかなり大きく体重によって支配されている。このため、古くからの放牧慣行を持っていた当地域においても、子牛の放牧は皆無である。さらに、種付を確実にし、ダニ・ハエなどによる害、草が悪くやせるなどの問題のため、親牛すら放牧に出さない農家が増加している(第1表)。なお、A集落の放牧料は無料である。17戸のうち放牧している農家は6戸、止めようとしているのが2戸、舎飼いのみが9戸となっている。放牧に出さない理由として、事故、やせる、ダニ・ハエと自分で里山を持っている、堆肥を取るためというのをあげている。

放牧組と舎飼い組の事故を比較すると、やゝ舎飼い組に、死産、流産、繁殖障害が多いようである。だが、放牧組にも放牧中の事故、発情の見逃しがある。事例が少ないので、今後数年の継続調査を必要とする。

第1表 肉用牛の飼養法と事故

No.	放牧	理由	放牧割合	事故	産
1	×	事故、やせる		死産1、流産1	28
2	×			死産1、流産死1、体内流産1	33
3	△	ダニ・ハエ	1/8		21
4	×	ダニ、S58まで放牧		死産1、産後死1、繁殖障害22月	17
5	×				17
6	○		3/6		17
7	○		2/6		17
8	×	里山放牧してる			14
9	△	子牛ついているので、里山放牧の方向	2/4→1/4	死産1、不妊1	15
10	×	危険、やせる			8
11	○		2/4	双子死産(9ヶ月)	10
12	○		2.5/4		9
13	○		3/3	母牛死1	10
14	×	堆肥作るため			6
15	×	里山放牧してる			7
16	×	堆肥取るため		死産1	6
17	○	省力化のため	1/2		3

2) 放牧組の平均分娩間隔は12.8ヶ月、舎飼い組は12.6ヶ月では、近い(第2表)。舎飼いの場合も里山放牧を行ったり、運動場に出している。むしろ、分娩間隔の良否は、飼養者の技術と管理の精度によると見た方がよい。

両者の子牛販売価格を比較すると、放牧組の去勢雄は27.4万円、雌は15.7万円、舎飼い組の去勢雄は28.0万円、雌は22.6万円である。雌の価格は舎飼い組が高いが、去勢雄の価格に差は無い。

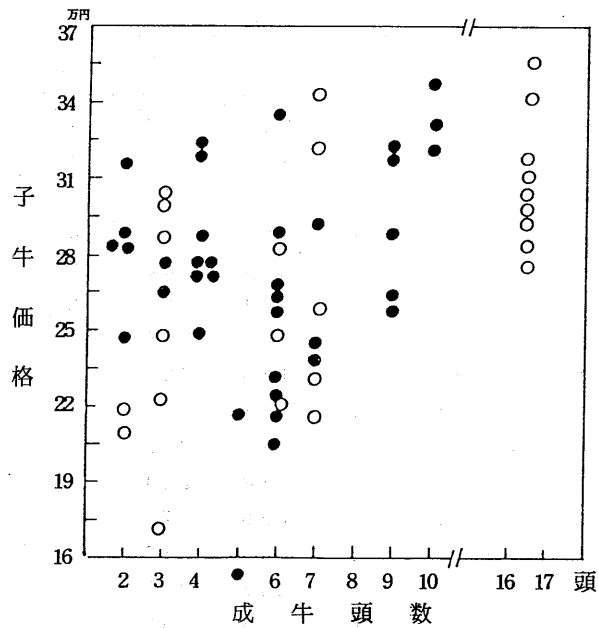
第2表 分娩間隔および子牛販売価格

農家 番号	分娩間隔					子牛販売価格、体重					
						去勢雄			雌		
	11月	12月	13月	14月	15月 以上	頭数	価格	体重	頭数	価格	体重
1	4	4	1	—	1	4頭	29.5 ^{万円}	272 ^{kg}	4頭	21.2 ^{万円}	261 ^{kg}
2	5	3	1	—	2	5	28.5	283	4	25.5	270
3	—	1	4	—	2	2	26.2	271	4	20.7	250
4	1	2	1	—	1	3	25.1	253	3	19.7	238
5	1	1	3	—	—	2	27.5	280	2	23.9	243
6	—	3	—	—	2	3	24.4	261	2	18.1	246
7	1	1	2	1	1	1	23.1	299	3	19.2	253
8	1	1	2	—	—	2	18.9	236	2	12.0	234
9	1	2	—	—	1	3	26.8	284			
10	1	—	—	1	—	1	32.3	289	1	23.0	248
11	2	1	—	1	—	3	28.8	294			
12	2	—	1	—	1	1	26.9	276	3	10.6	207
13	—	1	—	—	2	2	26.8	317			
14	—	—	2	—	—	1	24.2	245			
15	—	2	—	—	—	1	31.3	353			
16	1	1	—	—	—	2	28.3	326			
17	—	1	—	—	1	1	28.7	310			

3) 第1表に示す通り、子牛価格において、雌は去勢雄よりおよそ8万円低い。これは、子牛価格の低落を反映して、飼養頭数の増が頭打ちにあるためである。したがって、年間の子牛生産における、雌雄の割合は直接子牛販売収入に影響する。

4) 子牛価格形成に作用をおよぼす要因として、母牛の資質があげられる。40万円以上の導入された母牛16頭の子牛価格は次の通りである。去勢雄26頭の平均価格が27.4万円、雌16頭は21.1万円であって、全体の平均価格よりややよい。導入価格が60万円以上の12頭の子牛についてみると、去勢雄18頭の平均は27.4万円、雌13頭の平均は20.1万円で大差がない。高価格牛の導入による借金の利息等を考えると、慎重な判断が必要とされよう。

- 5) 前述したように、生後10ヶ月の体重が大きいほど、子牛価格が高いと言われるため、農家は濃厚飼料を過大に給与する傾向にある。だが、体重が大きくても、価格は低い子牛もかなり多いので、子牛生産費の赤字は当然、労働所得も赤字になりかねない。
- 6) 経産牛飼養頭数と子牛価格の関係を見てみよう(第2図)。子牛(去勢雄)の最低価格は、5~6頭において最も低く、それより頭数が多くなると高い。2~4頭飼養の場合は1頭当たり25万円位で、逆に5~7頭より高い。最高価格については、多頭化につれ、わずかに高い。経産牛を8頭以上飼養する農家は、技術水準が高いということが推察できる。



第2図 経営当り成牛頭数と子牛価格、去勢雄